

芽 接 ぎ の 詩 集 (5)

1 2

—放哉とその短律俳句—

Hōsai and His Short Metric Haiku

富 田 義 介

①

The Wanderer

It was in the garden of a madhouse that I met a youth with a face, pale and lovely, and full of wonder.

And I sat beside him on the bench, and I said, "Why are you here?" And he looked at me in astonishment and he said, "It is an unseemly question, yet I will answer you."……

"Each (father, mother, teacher) would have me but a reflection of his own face in the mirror."

"Therefore I came to this place. I found it more sane here. At least I can be myself"

Then all of a sudden he turned to me and he said, "But tell me, were you also driven to this place by education and good counsel?" And I answered, "I am a visitor."

Then he said, "Oh, you are one of those who live in the madhouse on the other side of the wall."*

*Kahlil Gibran, "The Mad Man" (New York: Alfred Knopf 1932) . pp.42f K. Gibran

②

放 浪 者

キチガイ病院の庭にひとりの若者がいた。顔色はよくないがハンサムな男で、独坐沈黙して何事か深く考えてる容子であった。

私は若者と同一ベンチに腰かけて「君はどういうわけで、この病院に……？」と訊

ねた。

すると若者はこれは、これは、分っちゃいないのですねアナタは。でも一応のご返事は致しましょうと答えた。「父も母も先生も皆私に自分らと同じように立身出世型の教育を受けさせようとするんですよ。ですからこの病院に難を避けて来たのです。ここに来て始めて人間らしい人間の生活ができるというものです。」

それから急に私の方に向き直って、じゃアナタも矢張り人間疎外の教育を受けて彼等の陣営に引きずり込まれたんですかと云うので「違いますよ、君。僕はここへ参観にきたんです、一寸ね。」と答えました。

「そうですね、アナタもこの壁の外側のキチガイ病院の患者さんなの？ 駭きましたね。」と若者は云いました。

㊦ 作者の K. Gibran は「失われた世代」者の1人であった。しかし放戡にも第1次大戦後における日本の失われた世代者としての嘆きの詩のあることを見落してはなるまい。次の詩をごらん下さい。

世の中のうそに汚れた私の心に
赤ん坊が喰ひ込んで来る
あの弱々しい視線をもって
私を見つめてゐるではないか
私の心は底から傷み出し
たへがたくおのゝく
私は赤ん坊をしっかりと抱かう
あの静かな視線に直面して』

何も見てゐない赤ん坊の目
しかし赤ん坊自身を見てゐる目
しかし、萬象を見つめてゐる目
なにも見てゐない赤ん坊の目が
不思議にぱちりと開いて
青空のやうに澄み切って

永劫の自己を求めてゐる
生れたばかりの赤ん坊の目が！

赤ん坊の面相の中に
人間が〔永〕劫に忘れて来たものがある
あの無心の赤ん坊の顔に
空と樹木と地と天体との
不可思議な行相があらはれるではないか
俺は赤ん坊を抱かう
俺の此の曲み歪んだ顔で
あの静な視線に直面して！

これは放哉が1924（大正13年）の暮（かれの須磨寺時代）に書いたもので K. Gibran が「放浪者」を書いた年代とほぼ同じところかと推定される。それ故吾々の意識から全く独立した形而上的世界のロゴス——プラトンのいうイデアの世界のロゴスに諸価値の根源を置こうとする現代の実存思想は第1次大戦後に発生した失われた世代者と共に急かにその勢力を拡大したものと見なければならぬ。随って吾々は放哉の文学こそが形而下的世界のロゴス——いわゆる場処の論理一辺倒に墮せんとする「世の中のうそ」に強い抵抗を感じた日本における最初の実存主義に基く抵抗の文学であったことをわれらは卒直に認めなければなるまい。〔‘the Lost Gsneration’ とは生活の基盤を離れて放浪する第1次大戦後の思想的難民の一種と見るべきで、これはアメリカばかりでのことではなかった。〕

〔4〕 尾崎放哉、本名は秀雄、は明治18年（1885）1月20日鳥取市に生れ、大正15年（1926）4月7日小豆嶋土庄町西光寺奥ノ院南郷庵において死す。戒名は「大空放哉居士」。明治41年に東京帝大法科を出て東洋生命に入った。何しろ鳥取一中からストリートに一高、一高からまっ直ぐ東大へ進んだ程の秀才で、刺刀のように鋭い頭の持ち主であったからバリバリと仕事をした。昇進も早かった。ただ酒癖の悪いのが玉に疵であった。そのために朝鮮生命の支配人として榮転はさせられたのはよいが、ここでも異常な成績をあげながら、酒の上の失言から社長をカンカンに怒らせ即時に首を切られた。しかし彼に云わせると、それは失言ではなかった。「粟スルニコノ「馬鹿正

直」ガ崇リヲナシテ、人ノ悪イ連中ガ社長ニイロイロ吹キ込ミタル結果也」と彼は云っている。この挫折がもとで彼は敢然として「世の中のうそ」に抵抗する「失われた世代」者の1人となった。妻をつれての満洲放浪の生活が始まった。しかし彼の得たものは悪性の肋膜炎と衰弱した体と極度の貧困とだけであった。内地に帰り、薫夫人との間に子の無かったのを幸、夫婦別れをして西田天香の一燈園で下座奉仕の生活に入ったのが大正12年の11月23日。きびしい労務に堪えられないので一燈園を出て智恩院常照院の寺男となったが、翌大正13年4月の初めに井泉水が東京を引き揚げ京都に来たので一緒に飲んだ酒の上の失敗がもとで常照院を逐われ、一時一燈園に帰っていたが、同年6月1日から真言宗須磨寺の大師堂の堂守をすることとなった。しかし翌大正14年の3月には須磨寺の内紛のためにまた一燈園に帰り、5月の中旬に若狭の小浜町浅間にある禅宗常高寺の寺男となって小浜へ行った。しかし7月には常高寺破産のために逐われてこんどは京都の竜岸寺の寺男として働らくことになったけれど肉体労働に堪えかね、寺を出て一時今熊野の井泉水宅に食客となった。しかし8月には井泉水ら「層雲」関係の人々の肝煎りで小豆島土庄町の蓮華院西光寺奥ノ院南郷庵に入ることとなった。南郷庵も須磨寺と同じように海の見える処にあった。自分は「わけなしに海が好きなのです。つまり私は、人の慈愛……と云ふものに飢ゑ、渴して居る人間なのでありませう。処がです、此の、個人主義の……世の中に於て、どこに人の慈愛が求められませうか……そこで勢之を自然に求めることになって来ます。」と彼は告白している。ここで彼は独坐無言・句作三昧の生活に入ることが出来た。そうして彼の作句は益々その光を加えることとなった。しかし南郷庵での彼の収入は1カ年僅かに50円程度のものであったから彼は豆をいって食ひ、サツマ芋をふかして食べ、1日1合の焼き米一米はその頃1升50銭一を噛じて辛うじて飢をしのいだが、栄養不良のために同じ年の暮には急性気管支炎、翌年（大正15年）の3月には喉頭結核が悪化して重態に陥り月がかわると間もなく死亡した。時に年42。戒名は「大空放哉居士」。

⑤ これから最もよく筆者のこころを打った放哉の名句若干について、いわゆる「芽接ぎの詩」を制作するとともに、何故にそれらの句が芽接ぎの詩の制作に値するかについて、短いコメントを付して俳人放哉の偉業が国際的にアプリシエートされることへの一助としたいと思う。

⑥ 入れものが無い両手で受ける

of vessels I have none.
Put your gift
In my hands.

<親切に独坐無言のこの私にそら豆か何か畑にできたものを少しばかり持ってきてくれる人があった。しかし自分は容れもの一つもたないので、両方のてのひらを合せて、これにどうぞと云ってありがたく頂戴した。>ただそれだけの話であるが、作者がこの句を制作しうる迄には、「独坐沈黙」をとおしての意識の内面化に努めた結果として、心の中の黒い霧が晴れ、我見我欲に拘わる一切の煩惱を捨離したさすがしい心境にあった筈。作者のこのような深静沈目の姿勢を、われわれはこ句の語と語との間から多かれ少なかれ透かして視ることが出来るからこそ、この句の魅力にとり憑かれるのである。このような句は語数が少くて、語と語との間の隙き間がたんとう有る方がよろしい。「入れものがない」と「両手で受ける」との間の大きなスキマから、私は放哉の姿勢をモロに透かしてみた。彼は尚も深くたましいのドン底にもぐり込んで彼の母親の子宮の中に帰ろうとしていた。南郷庵時代の作品。

⑦ 足のうら洗へば白くなる

Look pale my soles
As they're washed at dusk.

これも南郷庵時代の作。(蘇)東坡居士が事に坐して、恵洲(広東省)へ流され、それから海南島までも流された時、日暮になると必ず足を洗うのを常としていたそうだが、足を洗うことが居士にとっては、禅門でいう一つの威儀(作法)となっていたのだから、如何なる境界にも住着せず(われらの意識を超えた絶対意識又は前意識の中に居て)しかも事に臨んでは分明に自在に処置することの楽しさを、手桶に汲んだ水の中で足を洗いながら、放哉も、東坡居士と同じように、味っていたのでは無からうか。その淡々として落ちついた気持を、その平常坦然の心を、「足のうら洗へば白くなる」という truism に近い、このアホラシイ俳句が何と雄弁に表現していることよ。「景德伝燈録」に曰く「趙州、南泉に問う、如何なるか是れ道。泉云わく、平常心

是れ道。…道は知にも属せず、不知にも属せず、…若し真に不疑の大覚に達せば、猶お大虚の廓然洞豁たるが如し。」と。放哉には別に「とっぶり暮れて足を洗って居る」という句があるから、彼が足を洗った時刻が、いつも夕暮れであったと筆者が推定するのは間違いではなからう。

⑧ 墓のうらに廻る

I touched round

To back of the tombstone.

これも南郷庵時代の作品。われらは深静沈目して直下無心（絶対意識）の境に入る時、衆生と菩提（人間の靈性）との実際（一体感）に到達して自簡と他簡との共通の広場に出でくる。この時 Whitman がしばしば云うように自分と過去、現在、未来の人々とが相摂相入して互に相手の中に入ったり出たりすることが出来るようになる。いま放哉は、とある墓石の前に立って、その下に眠る未知の過去者と相摂相入して、懐しさに堪えず、自分も早くこの死者と同様に、母なる自然の子宮の中に帰って安養の世界に入り三界万靈と共に安らかな涅槃に入りたいとする womb phantasy にとりつかれて、墓石を撫でながら背なかの方まで廻って見たのであろう。「夏草や兵どもが夢の跡」という句を芭蕉が作った時、彼も亦多少の womb phantasy と、衆生と菩提との実際に包まれて、高館の古戦場を後ろの方までうろついて見たことであろう。放哉の行為は、一見無償行為のように見えるけれどそうではない。

⑨ 咳をしても一人

I'm alone

And cough alone.

これも南郷庵での作品。「私ハ多年ノ宿願ヲ達スルコトガ出来タ……其ノ宿願ト申スノハ、即、「独居」「独棲」ノ願デアリマス」と井泉水への手紙に書いている放哉であるから、この句が彼の孤独感とか寂寥感を求心的に現わしたものだとする考え方に、私は賛成しない。彼は決して、さびしがりやではなかった。独居、独棲は、むしろ——呑大いに彼の望む処であったのだから「咳をしても一人」は彼のひそかな満足_の意をあらわす句。かりそめにも世の中のウソにまじりたくなかった。

僅か九音節の短律句の形を取ってきっぱりと言い切っている処にも彼の自信と自得の程がうかがわれる。

㊿ こんなよい月夜を一人で見て寝る

I'm to sleep abed
Leaving the bright moon shining alone.

これも、このよい月夜を共に楽しむべき友もなくして独り寝ることのさびしさよ、ではなく、こんないい月夜を独占して眺めながら独り床に就くなんて、何とこの身に余る仕合せではある。これもみな小豆島にきて独居することの出来るようになった事のお庇というものだ。勿体ない話だ。という意味。これは、いくぶん叙情詩的な俳句だから、短律どころか17文字の普通の俳句になってしまった。

㊿ とんぼが淋しい机にとまりに来て居る

Came and sat
On my lonely desk
A clragon fly

この句でも、作者は淋びしさに泣いているのではない。むしろ積極的に閑寂を楽しんでいるのである。とんぼを引き合いにだした処に詩人に特有な Lyricism が有ってこの句を光彩ある美しいものに仕立てている。これも小豆島時代の作。

㊿ マッチの棒で耳かいて暮れてる

Night sets in
As with a match
I'm picking the ear.

私の尊敬する秋月龍珉師の歌に「うつせみの何か思わむここにして正しくわれのい・ば・り・を・するに」というのがある。人間が「世間のうそ」に目覚めて厭離穢土、欣求浄土のころを起すとき、価値意識の大きな conversion (転倒) が行われる。何事もうち忘れてマッチの棒で只耳の垢をほじくりにさえヤスパースのいう絶対意

識に近づくという大きな値えを覚えるようになる。いや只足の裏を洗うことにさえ、大きな価値を感じるようになる。況んやしてその時沈んでゆく夕日の美しさを見るに
おいておや。退屈も淋びしさも、もはや其処にはない。須磨寺時代の作。

13 人をそしる心をすて豆の皮むく

Giving up blaming others

Went and hulled my beans.

一燈園を出て、しばらく常照院の寺男を勤めていたが、酒の上の失敗で寺を追われ
て食うに困り、一燈園時代の友人の世話で、辛々と須磨の大師堂の堂守になって糊口
をしていた頃の作。若い頃円覚寺に参禅して宗演禅師からきいた筈の「脚下を照顧せ
よ」ということばを思いだして、豆の皮をむきむき、ふと思いついた句ではなからう
か。筆者はこのような彼の心の姿勢をこの句の下に置いてこれを透視するときに、強
く自分のたましいを揺さ振られる。とにかく怖るべき迫力をもって、あなた方も好ん
で人の悪口を言いたがる不心得を止めて、直下無心じまげになって豆の皮でもむきなされ、
豆がなかったら汚れた靴でもダメッテ磨くこと、気持がスーとするから。と私に云い
きかせてくれる。その時私は放哉の顔がほんのりと回光返照の微光をうけて、おぼめ
いているのを想像する。

14 風凧いでより落つる松の葉

Needles of pine

Begin to fall

When the gust is off.

小豆島の西光寺の奥ノ院南郷庵に蟄居中の作。欲の皮の突っ張り合いでギシギシ
した騒々しい俗世を遠く離れてこの庵に閑居していると意識の濁りがだんだんに消えて
澄みきった冬の池ようになる。すると今まで見えもせず、聴えもしなかった「風凧
いでより落つる松の葉」の音も形も甚深微妙なものに感じとられるようになる。「人
間は単独で実存に達するものではない。私は他人と共にのみ実存する。単独では私は
何者でもない。」とカール・ヤスパースは云った。「他人をそしる心をすて（無心にな
って）豆の皮をむく」時に、われらの意識はその背なかに総括的にこれを包む絶対意

識の自覚にまで、だんだんと到り着いてゆく。自にも執せず、他にも著せず、個々の意識がこれらすべてを包んでしかもこれを超越する絶対意識の共通の広場にて自分の影を見失うとき、初めてわたくしは、実存するであるとヤスパースは云っているのである。人はこのような実存に達したとき、放哉と同じようにマッチの棒で耳を搔くような日常茶飯の経験の中に、生きることの醍醐味を自得するようになるのである。

㊦ あすは元日が来る仏とわたくし

Tomorrow
Comes New Year's Day
Upon Buddha and me.

自分はみ仏のふところに抱かれて、この南郷庵に限りなき安らぎを得てダマッテ生活をしている。たとえ、他にどんな立派な収入のいい処があっても放哉はもう絶対にここを出て他処に移りたくない。それに海の景色が猶非常によく、自然の景色、近所の具合、全部私の気に入りました。どうせもう長くは生きられない私の体です。どうかこの庵で天命を果させて下さい。という旨の手紙を大正15年4月7日に瞑目した放哉は前年の9月18日づけで井泉水にあてて出している。盆が来ても、正月が来ても、この庵に穩棲するみ仏と自分には何の拘わり合いもないから、何のお構いもできない。放哉は死ぬまでここでじっとしています。という程の意味にこの句は解すべきであらう。わしもとうとう落ちつくべき処へ落ちついた。日日は好日だから、もうお正月が来ても別にどうと云うこともありませんよ、ということ。

㊦ めくい屋根で仕事してゐる

O, for me to be at work
On the roof
Basking in the sun!

須磨寺時代の作。実際にあったことか、それとも彼の fancy に過ぎないのか、わからない。しかしユーモアにあふれた淡々とした、しかも無欲恬淡に徹した、ゆかいな俳句である。お堂の中にいると線香を下さい、ろうそくを売って下さいなどというお参りの人たちが来るから、うるさい。屋根の上に登って日向ぼっこをしながら句作

の仕事をすると思も能率が上がるし、亦ゆかいなものだよ。一寸これ見ておくれんか。という程の意味であろう。

17 氷店がひょいと出来て白波

With surf below

There appeared an ice-stand

On a bank of sand.

これも須磨寺時代の作。氷店かヒョイと出来て、という表現は、いかにもコレハ、コレハと云わぬばかりの洒落れた表現である。砂山の上にひょいと出来た氷店に氷店特有の小さな旗がひるがえっている。下の方には白波がうち寄せている。和やかな美しい海景を見て胎内復帰の空想にとり憑かれた放哉はファンタジーの翼に乗ってヤスパースのいう絶対意識、深部心理学者 T. Burrow のいう前意識、の世界に飛びこんだ。禅門で「一超直入菩提地」というのがそれだ。さて彼がその絶対意識の裏付けのある眼をもって、ひょいと出来た氷屋のある海景を見た後で「深静沈目」して描いたイメージがこの句の内容である。まるでイマジストの詩を見るような句である。

18 枯枝ほきほき折るによし

O, to break the dead twigs,

With hands cracking!

小豆島時代の作。これから豆でも煮て食べようかと、かまどの前に集めて置いていた枯枝を手にとってほきほきと折る自分の所作を絶対意識に **back up** された感覚をとおしてこれを観ずる程に「直下無心」の境地に入ると、自分の手とポキポキと折れてゆく枯枝とそれがポキッポキッと折れる音との「実際」（一体感）が浅霧のヴェールのやうに彼の意識を包んで来たのであろう。禅門でいう「香巖撃竹」の故事を連想させる名句である。

19 恋心四十にして穂芒

At forty I knew

The beauty of love in fancy

And pampas grass in bloom.

小豆島時代の作。小豆島の上を匍うようにして流れてゆく朝霧の上に頭を上げ、旭に照らされて艶々しく光っている初秋の芒の穂を見ると、作者が東大在学中に彼の初恋の対象となった従妹沢芳衛（当時日本女子大生）のことが直ぐに思い出された。芳衛との結婚は近親結婚の結果を怖れる彼女の兄の反対に遇うて遂に実現しなかった。そこで止むなく彼は27歳（？）の時に旧姓坂根薫と結婚したが彼女との夫婦愛は芳衛との純愛に較べると「エス」的な肉欲性を多分に含む生々しい、べとべとした sexy love 以外の何ものでもなかったらしく、彼はいつまでも心の中では芳衛との 'love in fancy, (空愛) を護り続けたものようである。この句もペンをとって句作の三昧に入った時に彼の見たヴィジョンのスケッチであろう。筆者はこの句を黙誦すると、D. H. Lawrence の「ヘネフの駅にて」(Bei Hennef) という詩のことを何となく連想する。彼も放哉と同じく失われた世代者の一人であった。そして実存思想の系譜に属する秀れた詩人の一人でもあった。

㊦ わかれを云ひて幌おろす白いゆびさき

Saying goodbye
She with her fingers pale
Folded down the rikshaw hood.

沢芳衛が放哉のところへ最後の別れの挨拶に来て、人力車に彼女が乗って涙とともに「お大事に、さよなら、もう又お会いすることも……」と口籠って、車の中から彼女の白いゆびさきで幌をおろした彼女との別れの光景を彼はいつ迄も忘れることが出来ず、ヴィジョンとなって彼の眼の前に現われた処をスケッチしてこの句に収めたもの。天衣無縫の名句である。須磨寺時代の作。

㊦ 柘榴が口あけたたはけた恋だ

Ah, that cusséd love
Like a fat pomegranate
Crackéd open!

薫夫人との夫婦生活の中に含まれた生々しい肉欲充足のシーンを思いだして、これ

を沢芳衛との 'love in fancy' との対照において眺めた時の嫌悪の気持ちを象徴的に描いたものであろう。これも須磨寺時代の作。

㊦ 雨の舟岸により来る

Coming down

Through fog and rain,

Turned off to the bank, the boat.

大正13年2月3日の交、自分の病氣（咳頭結核）が急に悪化したことを知った放哉は井泉水（句誌「層雲」の主筆、一高時代からの放哉の句友であり先輩であった）宛ての手紙に「放哉、決して生きてく無い……病院……聞いただけでも……死にたくなる、食欲がなくなる、放哉は……モウモウ（人間社会）は、イヤイヤ。自然の中で、ダメッテ、死にたい……一人で……ありがたい事があります。」と書いている。こんなことを思いながら深静沈目していると突然彼の前にひとつの幻覚が現われた。胎内復帰の空想である。放哉が大正15年3月4日付けで青城子にあてて出した手紙の中に「長雨が降ってる川がある。……上流から小サイ舟に蓑笠の舟人が鰻を漕いで、ゴクゴク静かに静かに上流から下って来る——静だ、（略）（ドコまで行く舟だろう？）と思って見て居ると何か（ヨージ）があったのが、つい近くに来た処でダンダン舟を曲げて向ふの岸に着けるやうだ……向ふの岸には只雨が静かに降ってゐるばかりで誰も居ない、（略）所謂……静中、突如として無言の動が生じた場合を、大きな無言でウタッテ見たのですよ」と、彼はくわしくその空想のことを事細やかに記している。無論彼はフロイドもユングもブローも読まないのだから、それが水と死の想念に誘発された 'womb phantasy' であろうとは、夢想だにしなかったであろう、Whitman や D. H. Lawrence も詩を書く直前に時々幻覚を見た。しかしそれが彼らの womb phantasy であろうとはツユ知らなかったと同じように。

㊦ 小さい島に住み島の雪

O, to see this island

Quietly asleep

Under its snow!

自分はこの小さな島に住みついて、いたく海の見えるこの島の風景に愛着を覚えるようになった。冬になって大雪が降り、深い積雪 (drift of snow) を被ぶって、今この島が自然の懷に抱かれて安らかな眠りに入って居るところを見ると、私自身も亦あのように、五悪濁世の塵を避けて母なる自然のふところにダマッテ死にたいものだという意味。やはり彼の womb phantasy であり、彼はこのような空想の翼に乗ってヤスパースのいう絶対意識の中に深く潜入したかったのである。

㉔ くるりと剃ってしまった寒空

O, to bear, through frosty air,
My close-shavéd head!

直下無心の境地に近ずくと一切を捨てて捨て尽して頭の中までも無一物になりたい。ばかになりたい。イヤノウ頭の髪毛までくるりと剃って奇麗さっぱりとした方がいい。それに寒い冷めたいカラッ風が当って頭をひやして具れると百八煩惱が一度に消散していい気持ちだ。こうして人は忽ちその童心に帰るだろう。ユーモアにあふれた佳い句である。

㉕ 寒空シャッポがほしいな

Before chill and frost
I'd love to put a cap on my head.

前の句とペアになっている句。共に南郷庵での作。シャッポは明治時代によく使った外来語、帽子のこと。フランス語の chapeau に当る。こんな言葉を、帽子という代りにわざと此処に使用したところに、彼の童心とユーモアがある。祖師禪の僧が永い修行のち悟りを開いて絶対意識の中へ hark back すると、童心に立ち帰って、ユーモラスな気持ちになるものと見えて、古来禪門の公案には wit とユーモアを多分に含んだものが多い。婆子^{はす}焼庵といい、泥牛飛空といい、丙丁童子来求火といい、香巖上樹といい、雲門屎橛といい、殆どみなそうである。このことに気付かないのをメクラの垣のぞきと云う。

㉖ 窓あけた笑ひ顔だ

I opened my window

To find her smiling!

放哉の硬直な姿勢も、海の見える、しかも親切にかれの世話をしてくれる近隣の漁師の老夫婦、とりわけその婆さんの中に彼の母親代償の居てくれる南郷庵での生活に落ちつくに連れて、著しく緩解に近ずいて来た。しかしそれはもう漁師の夫妻の腕に抱かれての彼の死の間近に迫って来た頃のことであった。「窓あけた笑ひ顔」の主は、彼の窓に近い畑に立っていた例のお婆さんだったと私は思う。「此のお婆さんの世話になって自然の中に死ぬ」という言葉が彼の手紙の中に見える。

㊦ 春の山のうしろから煙が出だした

Back of the springtide hills

Streaks of smoke

are seen to rise!

「うらを見せおもてを見せてちるもみぢ」という辞世の句をのこして死んだ良寛さまと同じように、放哉は何の怖れもなく帰するが如くに自然の中で一人でダマツテ死んでゆく「ありがたい事があります」と云う得涅槃の悦びを<自分が死ぬ、火葬にされる、その煙が春の山（彼が死んだのは4月の7日であった）のうしろから静かに立ちのぼる>という image に換えて、これを自分の辞世の句としたのだと私は思う。「出だした」という表現が実に面白い。もう自分はきつと死ぬんだという prospect の vision である。この句は放哉が殆ど死ぬ直前に作ったものらしく、彼の作句の手控え帖の最後に記入されてあった句である。

放哉は芭蕉と同じように「侘つくしたる侘人」であった。人間にとって大切なことは、彼が何をするかではなく、彼がそれを為す時の自由の程度である。ただし自由は諸価値の根源であり、われらの主体性の基盤である絶対意識*からの突き上げに基いて「即自」（自己の現状）を打開しようとする熱意に燃える場合にのみ真の自由、最高の自由でありうる。だから放哉が俗世を厭うて隠遁生活をひたすらに求めたことは少しも彼の生活と業績とを depreciate する理由とはならないばかりでなく、却ってこれを高く評価すべき根拠となるであろう。実際のところ、現代を含む近代の俳

人の中での最高峯で大空放哉居士はあるだろうと考えるのは筆者のみでは無かろう。

(終り)

* この絶対意識を神と呼び、仏と名づけ、廓然無聖と云うことは、人それぞれの信仰の自由というものである。

主要なる参考書

- (1) 伊沢元美著「尾崎放哉」(南雲堂桜楓社発行)
- (2) *Trigant Burrow: Preconscious Foundations of Human Experience*
(published by Basic Books, Inc. New York)